

地域の異なる在宅高齢者の主観的幸福感 及び生活環境についての検討

片山妙恵^{*1}，中島英司^{*2}，吉川法生^{*1}，加藤順一^{*2}，富山直輝^{*1}

^{*1}作業療法学専攻，^{*2}理学療法学専攻

研究プロジェクト名

在宅高齢者の施設利用及び生活の満足度に関する研究

要旨

本研究は、在宅高齢者の主観的幸福感及び生活環境の地域差、関連性を明らかにすることを目的として、愛知県内の中核都市に在住する高齢者 11 名及び、地方都市に在住する高齢者 25 名を対象に、生活環境として家族構成、外出状況及び主観的幸福感としてPhiladelphia Geriatric Center Morale Scale (以下PGC) を調査し、結果はMann-WhitneyのU検定，²乗検定を用いて統計処理を実施した。

結果、全例が家族と同居していた中核都市において PGC 下位項目の一つ「不安」項目で消極的回答が多く、独居の割合が高かった地方都市において積極的回答が多く、高齢者の不安要因、家族関係において居住暦や具体的な支援状況、利用サービス等をふまえ、さらに追求していくことが重要であると思われた。また、外出状況において地方都市では中核都市に比して、近隣地域へ外出する割合が高く、高齢者におけるコミュニティの存在、主体的に取り組める活動が重要であると考えられた。

Key Words：在宅高齢者、外出、主観的幸福感

【はじめに】

高齢化率の急伸に伴い、地域在宅高齢者が増加傾向にある。高齢者のQuality of life (QOL) の維持向上が介護予防の視点からも重要視され、作業療法においても主要な課題である。QOLを構成する下位尺度は研究者により様々であるが、石原らは身体機能、家族や近

隣との人間関係、満足感や不安感等の主観的幸福感を含む心理的な側面、住居等の生活環境の4つに分類している¹⁾。とりわけ、老年期には、退職や家庭内における役割の変化や心身機能の低下に伴い不安の増強、満足度の低下等主観的幸福感が低くなることが予測され、ADLとともに関連研究が多数報告されている^{2)~9)}。また、対人関係や生活環境に関し、高齢者はその範囲が狭小化傾向にあり、在住する地域環境や社会文化的背景が高齢者の主観的幸福感に影響することが推測される。高齢者の主観的幸福感に関する研究では、年齢や性別、ADL、配偶者の有無等の影響が示唆されている^{2)~4)}。一方、地域環境や社会的背景をふまえた研究は意外に少ない。

今回、主観的幸福感及び生活環境の地域差、関連性に着目し、それらを明らかにすることを目的に、異なる地域に在住する高齢者の主観的幸福感及び家族構成・外出状況を調査、比較検討したので報告する。

【対象及び方法】

対象は、愛知県内の中核都市(高齢化率 14.0%、人口密度 3319.8 人/km²)に在住する高齢者(以下、中核群)11名(男:女=5:6、平均年齢 81.3±7.4歳)及び、地方都市(高齢化率 20.0%、人口密度 1124.1 人/km²)在住高齢者(以下、地方群)25名(男:女=19:6、平均年齢 80.8±6.4歳)とし、主観的幸福感及び家族構成、配偶者有無、介護度、障害老人自立度、外出状況について直接面談法にて聴取した。主観的幸福感は、Lowtonにより開発され¹⁰⁾、前田らにより日本語訳された⁷⁾ PGCを用いた(表2)。全例要介護認定を受け、通所リハビリテーションを利用している。統計処理には、Mann-WhitneyのU検定、²乗検定を用いた。有意水準は5%とした。

【結果】

1. 対象者の属性・家族構成(表1)

両群において、年齢、性別、介護度、自立度に差を認めなかった。中核群に比し地方群で独居の割合が有意に高かった。中核群では全例が家族と同居していた。

2. PGCの総得点及び項目別回答の状況(表2)

PGC 総得点の平均は地方群 10.2±4.1 点、中核群 9.7±4.7 点で中核群が地方群に比しやや低い傾向にあったが、有意な差は認めなかった。また、各項目における回答状況を表2に示す。両群ともに老いについての態度に関わる因子に含まれる項目(項目1・6・8)において過半数が消極的回答であり、孤独・不満感に関わる因子に含まれる項目(項目5・15)では積極的回答が多い傾向があった。「心配なことがたくさんありますか」という項目12で、地方群は中核群に比べ有意に積極的回答が多かった。なお、年齢、性別、要介護度、自立度等と PGC 総得点の差は両群ともに認めなかった。

表 1 家族構成

人 (%)

構成	中核群(n=11)	地方群(n=25)	統計
独居	0 (0.0)	6 (24.0)	*
高齢夫婦	3 (27.3)	3 (12.0)	n.s
二世帯以上	8 (72.7)	12(48.0)	n.s
その他	0 (0.0)	4 (16.0)	n.s

表 2 PGC 項目別回答の比較

人 (%)

質問項目		中核群(n=11)		地方群(n=25)		検定
		はい	いいえ	はい	いいえ	
1	人生は年をとるにしたがって悪くなりますか	9 (81.8)	2 (18.2)	15(60.0)	10(40.0)	n.s.
2	去年と同じように元気ですか	7 (63.6)	4 (36.4)	17(68.0)	8 (32.0)	n.s.
3	さびしいと感じることがありますか	6 (54.5)	5 (45.5)	8 (32.0)	17(68.0)	n.s.
4	小さなことを気にするようになりましたか	4 (36.3)	7 (63.6)	12(48.0)	13(52.0)	n.s.
5	家族・親戚との行き来に満足していますか	9 (81.8)	2 (18.2)	19(76.0)	6 (24.0)	n.s.
6	年をとって役にたたなくなりましたか	8 (72.7)	3 (27.3)	21(84.0)	4 (16.0)	n.s.
7	気になって眠れないことがありますか	3 (27.3)	8 (72.7)	8 (32.0)	17(68.0)	n.s.
8	年をとることは若いときに考えていたよりよいですか	4 (36.4)	7 (63.6)	7 (28.0)	18(72.0)	n.s.
9	生きていても仕方がないと思うことがありますか	4 (36.4)	7 (63.6)	11(44.0)	14(56.0)	n.s.
10	若いときと同じように幸福ですか	8 (72.7)	3 (27.3)	19(76.0)	6 (24.0)	n.s.
11	悲しいことがたくさんありますか	4 (36.3)	7 (63.6)	6 (24.0)	19(76.0)	n.s.
12	心配なことがたくさんありますか	5 (45.5)	6 (54.5)	3 (12.0)	22(88.0)	*
13	前よりも腹をたてる回数が多くなりましたか	3 (27.3)	8 (72.7)	5 (20.0)	20(80.0)	n.s.
14	生きることはさびしいですか	8 (72.7)	3 (27.3)	19(76.0)	6 (24.0)	n.s.
15	今の生活に満足していますか	8 (72.7)	3 (27.3)	18(72.0)	7 (28.0)	n.s.
16	物事をいつも深刻に考えますか	4 (36.4)	7 (63.6)	7 (63.0)	16(64.0)	n.s.
17	心配ごとがあるとおろおろしますか	2 (18.2)	9 (81.8)	8 (32.0)	17(68.0)	n.s.

*p<0.05

3. 外出状況

外出していると回答した者のその目的別割合を表 3 に示す。全例が各項目のいずれかを目的に外出していた。両群とも、受診を目的に外出する割合が高かった。中核群では外食を目的に外出する割合が地方群に比して有意に高かった。一方、地方群では農作業、老人会、知人宅の近隣地域への外出が有意に高かった。

表3 外出状況

人(%)

外出 目的	中核群(n=11)		地方群(n=25)		検定
	有	無	有	無	
受診	10(90.9)	1 (9.1)	22 (88.0)	3 (12.0)	n.s.
散歩	7 (63.6)	4 (36.4)	9 (6.0)	16 (64.0)	n.s.
農作業	0 (0.0)	11(100.0)	6 (24.0)	19 (76.0)	**
買い物	6 (54.5)	5 (45.5)	12 (48.0)	13 (52.0)	n.s.
老人会	0 (0.0)	11(100.0)	4 (16.0)	21 (84.0)	**
知人宅	0 (0.0)	11(100.0)	5 (20.0)	20 (80.0)	**
外食	8 (72.7)	3 (27.3)	11 (44.0)	14 (56.0)	*

**p<0.01 *p<0.05

【考察】

今回、異なる地域に在住する高齢者の主観的幸福感及び生活環境について検討した。高齢者の主観的幸福感について、坪井⁸⁾や山下ら⁹⁾は、在宅高齢障害者と特別養護老人ホーム入所者において、後者が有意に低かったと報告している。その要因として慣れ親しんだ家庭から見知らぬ施設へという住環境の変化を挙げている。対象者を全例在宅高齢者とした本研究では、PGC総得点は中核群が地方群に比してやや低い傾向にあったものの有意な差を認めず、地域で生活することにより、対人関係や生活環境、社会的活動等が維持されているのではないかと考えられた。

しかしながら、藤田ら⁴⁾は、大都市・地方中都市、農村地域に在住する高齢者を対象とする大規模調査から、「満足感」に地域差が認められたとしており、本研究においてもPGC項目別比較で、項目12「心配」に有意な差を認め、地域の社会文化的背景の影響を思索させた。この項目12は、Lowtonによる因子分析の結果、心理的動揺・安定に関わる因子に含まれるとされている。高齢者の不安感健康や孤独、経済面における不安、子どもが自分のことを気にかけてくれない不安が挙げられている¹¹⁾。中核群は全例家族と同居しているにも関わらず、不安が強かったことから家族関係において構成のみでなく、会話や一緒に過ごす時間、生活支援の状況においてのより詳細な調査の必要性が考えられた。

反して地方群で独居が多いにも関わらず不安が少なかった要因としては、近隣地域への外出割合からコミュニティの存在が影響しているのではないかと推測された。平成12年の内閣府の調査¹²⁾により、高齢者の6割が徒歩で外出をしているとの報告がある。よって、地域により徒歩圏内に存在する施設やコミュニティが異なることの高齢者への影響が考えられる。また、地方都市は中核都市より農業等の第一次産業従事者が多いことから、農作

業目的の外出は活動の継続性を示唆しており、高齢者が主体的に活動できる場の存在を伺わせた。

しかし、コミュニティの存在や参加、活動の場に関しては、居住暦等その地域での馴染み等も検討すべきであり、先行研究²⁾において居住暦が幸福感へ影響を及ぼすという報告もあることから、今後居住地との馴染みに関連する調査の必要性が思索された。

主観的幸福感は友人・隣人のサポートの授受において高まる傾向にあり、幸せな老後を送るためには、主観的幸福感を高めるソーシャルサポートが必要であると佐藤¹³⁾は訴えている。本研究の結果、コミュニティの存在や主体的に取り組める活動の場が高齢者にとって重要であることが考えられ、地域で活躍する作業療法士は、その地域性を十分に考慮したサポートが必要であることが伺えた。

【まとめ】

在宅地域の異なる高齢障害者の主観的幸福感、生活環境を調査、比較検討した結果、以下のことが推測された。

家族構成、外出状況で地域間差があり、高齢者にとってコミュニティの存在、主体的に取り組める活動が重要であると考えられた。

PGC「不安」項目に有意差を認め、高齢者の不安要因、家族の支援状況等において今後追求する意義は深いと思われた。

今後さらに対象者数を増やし、居住歴や具体的な支援状況、満足感に関する検討を継続したい。

【文献】

- 1) 石原治，内藤佳津雄，長嶋紀一：主観的尺度に基づく心理的な側面を中心とした QOL 評価表作成の試み．老年社会科学 14：pp．43-51，1992．
- 2) 谷口和江，浅野仁，前田大作：身体的活動レベルの高い男性高齢者のモラール．社会老年学 12：pp．47-58，1980．
- 3) 須貝孝一，安村誠司，藤田雅美，蘭牟田洋美，井原一成：地域高齢者の生活全体に対する満足度とその関連要因．日本公衆衛生雑誌 43 (5)：pp．374-389，1996．
- 4) 藤田利治，大塚敏男，谷口幸一：老人の主観的幸福感とその関連要因．社会老年学 29：pp．75-85，1989．
- 5) 横山博子：主観的幸福感の多次元性と活動の関係について．社会老年学 26：pp．76-88，1987．
- 6) 小林法一，宮前珠子：高齢者の主観的 QOL の評価 - PGC モラールスケールの工夫と満足度 100 点法について．総合リハビリテーション 30 (4)：pp．359-362，2002．
- 7) 前田大作，浅野仁，谷口和江：老人の主観的幸福感の研究 - モラール・スケールによ

- る測定の試み．社会老年学 11：pp．15-31，1979．
- 8) 坪井章雄：在宅高齢障害者と特別養護老人ホーム利用者の QOL の比較検討．作業療法 15 (4)：pp．317-321，1996．
- 9) 山下一也，小林祥泰，山口修平，小出博巳，今岡かおる，ト蔵浩和，須山信夫：社会的活動性の異なる健常老人の主観的幸福感と抑うつ症状．日本老年医学会雑誌 30 (8)：pp．693-697，1993．
- 10) Lowton, M. P. : The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : Arevision . J . Gerontol 30 : pp . 85-89 , 1975 .
- 11) 内閣府：高齢者の生活と意識 第 4 回国際比較，1996．
- 12) 内閣府：高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査結果，2001．
- 13) 佐藤サツ子：在宅高齢者の主観的幸福感とソーシャルサポートの関連性．日本赤十字秋田短期大学紀要 5：pp．11-19，2001．